

日本祖語の母音体系 上代東国方言資料による再構

著者	日野 資成
雑誌名	日本語系統論の現在Perspectives on the Origins of the Japanese Language
巻	31
ページ	187-206
発行年	2003-12-26
その他のタイトル	A Reconstruction of the Proto-Japanese Vowel System on the Basis of the Data from Eastern Old Japanese
URL	http://doi.org/10.15055/00005277

日本祖語の母音体系

—上代東国方言資料による再構—

日 野 資 成

福岡女学院大学

キーワード: 日本祖語、上代特殊仮名遣い、融合、東国方言、連体形

1. はじめに

日本祖語にはどのような母音が存在したのであろうか。文献は、古事記、日本書紀、万葉集など、上代（奈良時代およびそれ以前）にまでしかさかのぼれない。したがって、それ以前の日本祖語を考えるには上代の母音体系をもとにさかのぼって再構するしか方法はない。

本稿では、まず日本祖語の母音体系について代表的な学者の説を紹介し、次に私の考えを、上代東国方言による資料をもとに述べる。しかし、それぞれの学説はみな上代の母音体系をもとに考えているので、まずは上代にはどのような母音が存在していたかを簡単に解説する。

上代の母音体系を考察する上で大きな手がかりとなるのが、橋本（1931）による「上代特殊仮名遣」の発見である。橋本は、本居宣長（1798）の「古事記伝」と宣長の弟子の石塚龍麿（1798）による「仮名遣奥山路」の研究をもとに、上代にはエ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ノ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロの13のかながそれぞれ次のように二種類に分けて使われていることを発見した（それぞれ代表例を5つずつ挙げる。なお、「の」については「ぬ」を後に改めたものである）。注1

え	「衣」類	愛・衣・榎・荏・得
	「延」類	延・曳・要・枝・江
き	甲類	支・岐・伎・妓・吉
	乙類	己・奇・氣・貴・紀
け	甲類	計・稽・家・溪・啓
	乙類	開・既・該・階・戒
こ	甲類	古・故・枯・固・庫
	乙類	許・巨・去・居・虚
そ	甲類	蘇・宗・素・祖・巷
	乙類	曾・増・憎・所・諸
と	甲類	刀・斗・土・杜・渡
	乙類	止・等・登・騰・藤
の	甲類	怒・努・弩
	乙類	能・乃・廼

ひ	甲類	比・卑・譬・必・賓
	乙類	非・悲・肥・彼・被
へ	甲類	幣・弊・平・陞・反
	乙類	閉・倍・陪・杯・俳
み	甲類	美・弥・民・三・見
	乙類	微・未・味・尾・箕
め	甲類	謎・綿・面・馬・女
	乙類	米・毎・梅・妹・目
よ	甲類	用・庸・遥・容・欲
	乙類	余・与・誉・預・四
ろ	甲類	漏・路・露・楼・慮
	乙類	呂・侶・稜・勒・里

(橋本 1949:171-3)

この区別がわかったのは、それぞれの上段の仮名(「衣」類・甲類)はあるグループの語にのみ、下段の仮名(「延」類・乙類)はそれとは別のグループの語のみに使われていたからである。たとえば、/ko/ (子)や /hiko/ (彦) などの /ko/ には「古・故・枯・固・庫」などのグループの漢字が使われているのに対し、/kokoro/ (心) などの /ko/ には「許・巨・去・居・虚」などの漢字が使われ、「古」が /kokoro/ の /ko/ を表すのに使われたり、「許」が /hiko/ の /ko/ を表すのに使われることはなかった。同様に、/kimi/ (君) の /ki/ には「支・岐・伎・妓・吉」などの漢字が使われ、/tuki/ の /ki/ には「己・奇・気・貴・紀」などの漢字が使われ、両者が混同されることはなかったのである。なお、「衣」類と「延」類の区別については、ア行母音[e]とヤ行母音[ye]の区別であり、他の甲乙の区別とは別個に考えられる。したがって「上代特殊仮名遣」といえば、上のキ・ケ・コ・ソ・ト・ノ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロに、濁音のギ・ゲ・ゴ・ゾ・ド・ビとモを加えて 19 の仮名を指す。モについては、古事記(712年)では区別されているが、日本書紀(720年)では区別が失われている。

甲乙の仮名遣いの違いは、音韻の違いを表しているという解釈ができる。橋本(1942:116-20)は「二類の別は多分 i e o 等の母音の附いたものと、之に似た中間母音又は二重母音などの附いたものとの差であるらしい」といっているが、金田一(1938:411)は次のような母音を提示した。

	イ列音	エ列音	オ列音
甲類	-i	-e	-o
乙類	-ĩ	-ë	-ö

乙類の母音はすべて中舌母音であったと推定している。もしもイ列音、エ列音、オ列音の母音が中舌母音であるとする、上代の母音体系は次のようになる(i₁・e₁・o₁(甲類)、i₂・e₂・o₂(乙類)の表記は松本(1995)による)。

図1 上代の母音体系

	前舌	中舌	後舌
狭	i ₁ , i ₂		u
中	e ₁ , e ₂		o ₁ , o ₂
広		a	

上代には、二種類の /i/、/e/、/o/ に /u/ と /a/ を加えて八種類の母音が存在したことになる。上代に存在した8つの母音はどのようにしてできたのか。次に、日本語の母音に関するいくつかの学説を紹介する。

2. 日本語の母音体系についての学説

ここでは、大野(1977)、Serafim(1977)、服部(1976)の説をそれぞれ紹介する。

2.1 大野晋による四母音説

大野(1977: 187-204)は、上代の8母音のうち、a・u・o₂・i₁を主母音、e₁・e₂・i₂・o₁を副母音として区別し、副母音は主母音の融合によってできた(ia → e₁、ai → e₂、oi → i₂、ui → i₂、ua → o₁)とする。主母音と副母音に分けた4つの根拠を次にまとめる。

(1) e₁・e₂・i₂・o₁という母音は、a・u・o₂・i₁に比較して使用頻度が極めて少ない。

まず、エ列音(e₁, e₂)がア・イ・ウ・オ列音に比べて次のように少ない。

ア列音	12,120	28.9%
イ列音	9,633	23.0%
ウ列音	6,415	15.3%
エ列音	3,838	<u>9.1%</u>
オ列音	9,941	23.7%

次に、イ列音では、i₂がi₁よりも極めて少ない。

キ・ヒ・ミ・ギ・ビの i ₁	3,160	89.5%
キ・ヒ・ミ・ギ・ビの i ₂	370	<u>10.5%</u>

さらに、オ列音では、o₁がo₂よりも極めて少ない。

コ・ソ・ト・ノ・ヨ・ロ・ゴ・ゾ・ドの o ₁	1,030	<u>16.3%</u>
コ・ソ・ト・ノ・ヨ・ロ・ゴ・ゾ・ドの o ₂	5,280	83.7%

(2) e₁—e₁、e₂—e₂、i₂—i₂、o₁—o₁という母音の複合によって語根を形成することが原則的にない。一方、a—a、u—u、o₂—o₂、i₁—i₁という母音の複合によって語根を形成する例は次のように数多くある。

- ① a—a asa (朝)、ama (甘)、ara (荒)、awa (泡)、kasa (笠)
- ② u—u usu (臼)、usu (薄)、utu (現)、uru (愚)、udu (珍)
- ③ o₂—o₂ o₂ko₂-ru (起)、o₂so₂ (遅)、o₂so₂-ru (恐)、o₂to₂-ru (劣)、ko₂so₂ (助詞)
- ④ i₁—i₁ mi₁mi₁ (耳)、ki₁mi₁ (君)、siki₁mi₁ (櫓)、imi₁ki₁ (忌寸)、fi₁fi₁-ku (響)

(3) $e_1 \cdot e_2 \cdot i_2 \cdot o_1$ は、語の末尾か途中に現れるものが極めて多い。

(4) その中には $ia \rightarrow e_1$, $ai \rightarrow e_2$, $o_2i \rightarrow i_2$, $ui \rightarrow i_2$, $ua \rightarrow o_1$ という由来を持つと推定できるものが少なくない。それぞれの融合の例を挙げる。

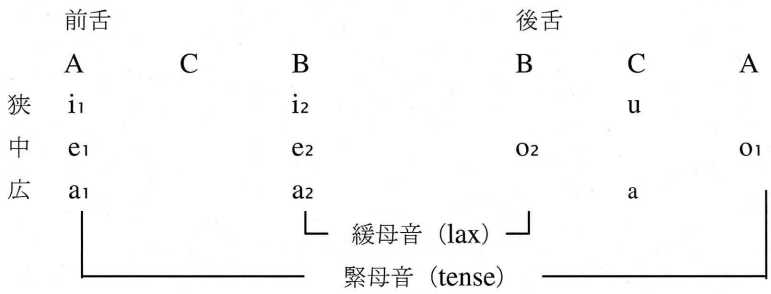
融合	例
$ia > e_1$	*saki-ari (咲有) > sake ₁ ri, *samuki-aku > samuke ₁ ku
$ai > e_2$	*taka-iti (高市) > take ₂ ti, *naga-iki ₁ (長息) > nage ₂ ki ₁ (歎き)
$ui, oi > i_2$	*kamui (神) > kami ₂ , *ko-i > ki ₂ (木),
$ua > o_1$	*kazu-afe ₂ (数合へ) > kazo ₁ fe, *tudu-afe ₂ (粒合へ) > tudo ₁ fe ₂ (集へ)

日本祖語においては、主母音のみが存在し、副母音は主母音の組合せでできたというのは理にかなった説である。しかし、すべての副母音が主母音の組合せで説明できるわけではない。たとえば、 me_2 (目) は「まなこ」のように ma があるので * $ma-i$ を再構し、融合によって me_2 になったことが考えられるが、 me_1 (女) は mi という形態素がないので * $mi-a$ を再構するのは無理がある。また、 $kuro_1$ (黒) も $kura$ (暗) があるので * $kura-u$ を再構し、融合によって $kuro_1$ になったと考えられるが、 ko_1 (子) は ka という形態素がないので * $ka-u$ を再構するのは無理がある。

2.2 Serafim による十母音説

Serafim (1977) は、以下のような十の母音が日本祖語にあったという仮説を立てている。

図2 Serafim による日本祖語の母音体系 (十母音説)



A は甲類、B は乙類の母音、C は甲乙の区別のない母音である。甲乙の区別が日本祖語においてすでにあったという説で、前舌広母音の存在を仮説として立てている点、それにさらに甲乙の区別があったという点が特徴である。

前舌広母音 a_2 の存在を裏付けるのが次の動詞のペアである (Serafim 1976: 35 より)。

	前舌 (自動詞)	後舌 (他動詞)
狭	sugi ₂ (過ぎ)	sugus (過ぐす)
中	fozro ₂ bi ₂ (*fozro ₂ be ₂) (滅び)	fozro ₂ bos (滅ぼす)
広	ake ₂ (*ak ₂) (明け)	akas (明かす)

三つの自動詞の連用形活用語尾の母音（前舌母音）と、それぞれの動詞の他動詞の語幹の最後の母音（後舌母音）が対応している。後舌母音の高さは、**u**（「狭」）、**o**（「中」）、**a**（「広」）であるが、それに対応する前舌母音の高さは、**i₂**（「狭」）、**i₂**（「狭」）、**e₂**（「中」）である。もし、後舌母音の「狭」「中」「広」に前舌母音も「狭」「中」「広」が対応するとすれば、**i₂**（「狭」）、**e₂**（「中」）、**a₂**（「広」）となる（「中」「広」については括弧内に示した）。

同じく前舌広母音 **a₂** の存在を裏付ける名詞のペアを次に挙げる。

	前舌	後舌	前舌	後舌
狭	tuk i₂ （月）	tuk <u>u</u> -yo（月夜）	kam i₂ （神）	kam <u>u</u> -kaze（神風）
中	ki₂ (* ke₂)（木）	ko₂ -nure（木末）	fi₂ (* fe₂)（火）	fo -naka（火中）
広	sake 2 (*saka a₂)（酒）	saka <u>a</u> -duki ₁ （杯）	ame 2 (*ama a₂)（雨）	ama <u>a</u> -gozmozri（雨籠）

被服形の最後の音節に含まれる後舌母音の高さは、**u**（「狭」）、**o₂**（「中」）、**a**（「広」）であるが、それに対応する前舌母音の高さは、**i₂**（「狭」）、**i₂**（「狭」）、**e₂**（「中」）である。もし、後舌母音の「狭」「中」「広」に前舌母音も「狭」「中」「広」が対応するとすれば、**i₂**（「狭」）、**e₂**（「中」）、**a₂**（「広」）となる（「中」「広」については括弧内に示した）。

十の母音がバランスよく並び、整った母音体系であるが、前舌広母音 **a₁** の存在を裏付けるのがむずかしいのが弱点である。

2.3 服部（1976）による六母音説

次に、服部（1976: 24, 29, 31）の説を紹介する。服部は奈良中央方言における母音をもとに、以下のような日本祖語の母音を提示する。

図3 日本祖語から上代への母音変化

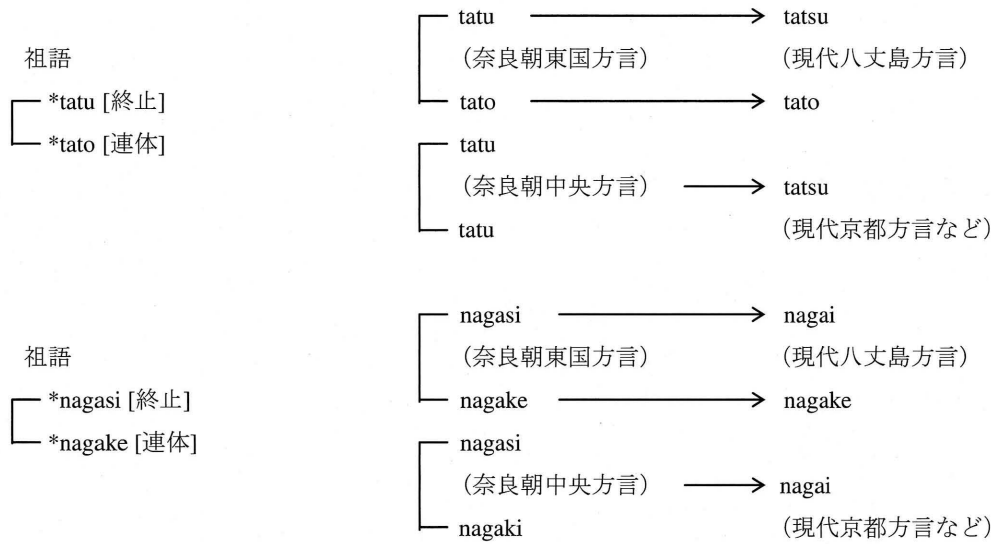
日本祖語	奈良中央方言
*i	i ₁
*e	i ₁
*ə	o ₂
*a	a
*u	u
*o	u
*ai	e ₂
*ia	e ₁
*au	o ₁
*ui,əi	i ₂

このように服部は、大野による母音融合説を取り入れつつ（*ai が乙類の/e/に、ia が甲類の/e/に、au が甲類の/o/になる）、日本祖語の*e と*i が甲類の/i/に、*o と*u が/u/に合流したと考える。さらに、奈良中央方言の乙類の/o/については、*ə を想定することによって、次のような日本祖語における母音体系を提示した。

図 4 服部による日本祖語の母音体系（六母音説）

	前舌	中舌	後舌
狭	i		u
中		ə	
中	e		o
広		a	

これはバランスの取れた体系である。さらに、*o から/u/と、*e から/i/への母音変化の根拠として奈良時代の東国方言と現代の八丈島方言を挙げる（服部 1976: 26,28 より）。

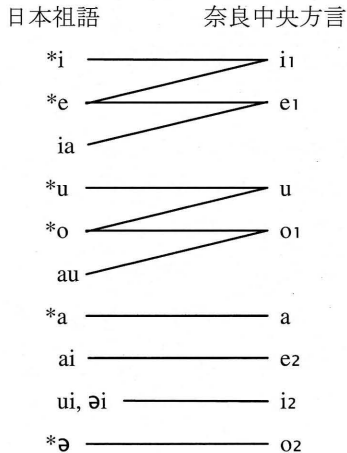


2.4 まとめ

三人の学説のうち、まず Serafim の十母音説はバランスがとれてはいるが、前舌広母音の存在を証明することがむずかしい。大野の四母音説は主母音と副母音を統計学的に分けて主母音の融合によって副母音ができたという体系的に整理された学説であるが、ua が o になったとする例の祖語形「数合へ」「粒合へ」の実例がないし、すべての副母音を融合によって説明することはできない。最後に、服部の六母音説は大野の母音融合を認め、なおかつ日本祖語に*e と*o を認めている点が実例に即している。つまり、*me₁ (女) や*ko₁ (子) のような母音融合では考えられない形式を祖語に含めた点である。ただ、この*me₁ (女) や*ko₁ (子) は奈良

時代に *mi*₁ や *ku* にはならず *me*₁、*ko*₁ のままであったので、1.3 の服部の表（日本祖語から奈良中央方言への母音変化）に **e* → *e*₁、と **o* → *o*₁ も付け加えると以下ようになる。

図5 日本祖語から上代への母音変化（服部の説をもとに）



日本祖語にあった六母音のうち **i*・**e*・**o* はすべて奈良中央方言の甲類の母音 *i*₁・*e*₁・*o*₁ に発展した。また、**e* は一部が *i*₁ になることによって、**i* とともに *i*₁ に合流 (merge) すると同時に *i*₁ と *e*₁ に分化 (split) した。*ia* は **e* とともに *e*₁ に合流した。同様にして **o* は一部が *u* になることによって、**u* とともに *u* に合流すると同時に *u* と *o*₁ に分岐した。*au* は **o* とともに *o*₁ に合流した。

o* の一部が *u* に合流したことと、e* の一部が *i*₁ に合流したことの証拠を次の2節で示したい。

3. 母音変化 (**o* > *u*、**e* > *i*₁) の証拠

第1節で紹介した中では、1.3 の服部の六母音説が最も有力であると考えられる。というのは、服部は大野の母音融合説を取り入れつつ、さらに八丈島方言や上代東国方言の例をもとにしているからである。ここでは、私の集めた東国方言と中央（奈良）方言の音韻対応表をもとに、日本祖語の母音 **o* が *u* に合流した証拠を 3.1 で、母音 **e* が *i*₁ に合流した証拠を 3.2 で示す。

3.1 **o* > *u* の証拠

東国方言の *o*₁ と中央方言の *u* は、動詞連体形ならびに助動詞「む」の連体形活用語尾において 47 例、形態素の中において 6 例、全部で 53 例において対応している。なお、詞書によって東国方言の *o*₁ が起った国が特定できる場合は、その国の名を括弧内に入れた。

東国 *o*₁: 中央 *u* （活用語尾） （47 例）

(Vol.14) *araparo*₁: *araparu* (3414 上野), *semo*₁: *semu* (3418 上野),

puro: puru (3423 上野), semo: semu (3426 陸奥), piko: piku (3431 相模),
noraro: noreru (3469), mo: mu (3472), nemo: nemu (3473), namo: ramu (3476),
tato: tatu (3476), apo: apu (3478), nemo: nemu (3494), aro: aru (3509),
sino₂pamo: sino₂pamu (3516), namo: ramu (3526),
yuko₁no₂su: yukuno₂su (3541), pararo: pareru (3546), namo: ramu (3552),
mopono₂su: mopunasu (3552), mato₁no₂su: matunasu (3561),
mato₁mo: matumo₂ (3561), namo: ramu (3563)
(Vol.20) mi: mo: mi: mu (4329 相模), papo: papu (4352 上総),
wataramo: wataramu (4355 上総), mukamo: muke: mu (4359 上総),
wasuremo: wasuremu (4367 常陸), demo: demu (4383 下野),
yuko₁saki: yukusaki₁ (4385 下総), tamapo: tamapu (4389 下総),
yukamo: yukamu (4406 上野), mi: temo: mi: temu (4415 武蔵),
otimo: otimu (4418 武蔵), mo: pamo: mo: pamu (4419 武蔵),
papo: papu (4421 武蔵), nemo: nemu (4422 武蔵), mi: mo: mi: mu (4423 武蔵)

東国 01: 中央 u (形態素内) (6 例)

(Vol.14) *wosagi*: *usagi*₁ (3529) , *ayapokadoz*: *ayapukedo*₂ (3539)
semi,do: *simi,du* (3546) , *sugo,samu*: *sugusamu* (3564)
 (Vol.20) *nanipato*: *nanipatu* (4380 下野) ,
popomaredo: *pupume,redo*₂ (4387 下総) ,

01の起った国が特定できる例が全部で21例ある。そのうち活用語の連体形は11例である。一方同じ東国において、中央方言と同じく動詞助動詞の連体形や形態素内にu語尾が起り、国が特定できる例も23例ある。それぞれの例を国別に示す。

国	-o ₁	-u
下野	多志 ¹ 遲 ² 毛 ³ 等伎尔 (MYS-20-4383)	
	tas-ide-m-o ₁ to ₂ ki ₁ ni	
	stand-go out-TENT-ATTR time CONJ	
	奈尔波 ¹ 刀 ² 乎 (MYS-20-4380)	
	Nanipa-to ₁ wo	
	Naniwa-port ACC	
上総	波 ¹ 保 ² 麻 ³ 米 ⁴ 乃 (MYS-20-4352)	
	pap-o ₁ mame ₂ no ₂	
	crawl-ATTR bean GEN	
上野	安良波 ¹ 路 ² 萬 ³ 代 ⁴ 母 (MYS-14-3414)	美 ¹ 留 ² 比 ³ 等奈思尔 (MYS-14-3405)
	arapar-o ₁ made mo ₂	mi ₁ -ru pi-to ₂ nasi ni
	appear-ATTR extent EMPH	see-ATTR person not exist CONJ

- 降路与伎能 (MYS-14-3423)
 pur-**o**₁ yo₂ki₁ no₂
 fall-ATTR snow GEN
 由加毛比等母我 (MYS-20-4406)
 yuk-am-**o**₁ pi₁to₂ mo₂ga
 go-TENT-ATTR person DESD
 武蔵 美祢波保久毛乎 (MYS-20-4421)
 mi₁ne pap-**o** kumo₁ wo
 peak crawl-ATTR cloud ACC
- 下総 由古作枳尔 (MYS-20-4385)
 yuk-**o**₁ saki₁ ni
 go-ATTR front LOC
 常陸 和須例母之太波 (MYS-20-4367)
 wasure-m-**o**₂ sida pa
 forget-TENT-ATTR time TOP
- 相模 比古布祢乃 (MYS-14-3431)
 pi₁k-**o**₁ pune no₂
 draw-ATTR boat GEN
- 多都努自能 (MYS-14-3414)
 tat-**u** no₂zi no₂ (3414)
 stand-ATTR rainbow GEN
 布久日布加奴日 (MYS-14-3422)
 puk-**u** pi₁ puk-an-u pi₁
 blow-ATTR day blow-NEG-ATTR day
 等夫登利乃 (MYS-14-3381)
 to₂b-**u** to₂ri no₂
 fly-ATTR bird GEN
 多比由苦世奈我 (MYS-20-4416)
 tabi₁ yuk-**u** sena ga
 trip go-ATTR husband NOM
 由可牟古馬母我 (MYS-14-3387)
 yuk-am-**u** ko₁ma mo₂ga
 go-TENT-ATTR colt DESD
 伊伎豆久伎美乎 (MYS-14-3388)
 iki₁duk-**u** ki₁mi₁ wo
 breathe-ATTR you ACC
 可加奈久和之能 (MYS-14-3390)
 kaka nak-**u** wasi no₂
 ONMP cry-ATTR eagle GEN
 多都登利能 (MYS-14-3396)
 tat-**u** to₂ri no₂
 stand-ATTR bird GEN
 多々牟佐和伎尔 (MYS-20-4416)
 tat-am-**u** sawak-i₁ ni
 stand-TENT-ATTR be noisy-INF CONJ
 由可牟加利母我 (MYS-20-4366)
 yuk-am-**u** kari mo₂ga
 go-TENT-ATTR wild goose DESD
 之多布久可是乃 (MYS-20-4371)
 sita puk-**u** kaze no₂
 under blow-ATTR wind GEN
 佐須和奈乃 (MYS-14-3361)
 sas-**u** wana no₂
 set up-ATTR trap GEN

美毛比等母我毛 (MYS-20-4329)
 mi₁-m-o₁ pi₁to₂ mo₂gamo₁ (4329)
 see-TENT-ATTR person DESD

駿河

信濃

遠江

安我世武比呂乎 (MYS-20-4329)
 a-ga se-m-u pi₁ro₂ wo
 I-GEN do-TENT-ATTR day ACC
 美流波々奈之尔 (MYS-20-4330)
 mi₁-ru papa nasi ni
 see-ATTR mother not exist CONJ

阿佐許求布祢波 (MYS-14-3430)
 asa ko₂g-u pune pa
 morning row-ATTR boat TOP
 美豆久白玉 (MYS-20-4340)
 mi₁duk-u sira-tama
 be soaked-ATTR white-ball
 奈久許恵伎氣婆 (MYS-14-3352)
 nak-u ko₂we ki₁k-e₂ba
 cry-ATTR voice hear-CONS.GER
 安布許等可多思 (MYS-14-3401)
 ap-u ko₂to₂ katasi
 meet-ATTR thing be difficult
 奈久古良乎 (MYS-20-4401)
 nak-u ko₁ra wo
 cry-ATTR child ACC
 等能妣久夜麻乎 (MYS-20-4403)
 to₂no₂bi₁k-u yama wo
 trail-ATTR mountain ACC
 乃牟美豆尔 (MYS-20-4322)
 no₂m-u mi₁du ni
 drink-ATTR water LOC
 多妣由久阿礼波 (MYS-20-4327)
 tabi₁ yuk-u ware pa
 trip go-ATTR I TOP

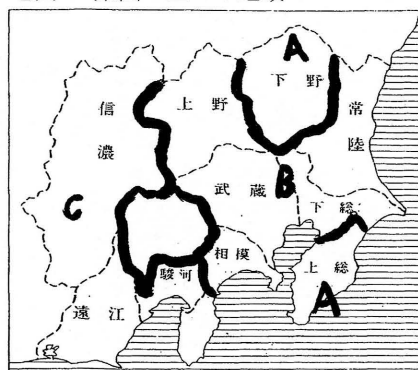
o₁語尾と u 語尾の数を国ごとに示したのが次の表 1 である。

表 1: 東国方言 国ごとの -o₁ と -u の数

国/ 語尾	-o ₁	-u	合計
A 下野	2	0	2
上総	1	0	1
B 上野	3	3	6
武蔵	1	2	3
下総	1	1	2
常陸	1	6	7
相模	2	3	5
C 駿河	0	2	2
信濃	0	4	4
遠江	0	2	2
合計	11	23	34

この結果から東国を、-o₁のみが起る地域 A（下野・上総）、-o₁と u が起る地域 B（上野・武蔵・下総・常陸・相模）、-u のみが起る地域 C（駿河・信濃・遠江）の三つに分けることができる。次の地図 1 に、この三つの地域を示す。

地図 1 東国の三つの地域



中央の奈良では -u 語尾のみが起っている。中央から最も近い地域 C でも -u 語尾のみが起り、中央から最も遠い地域 A では -o₁語尾のみが起り、その中間の地域 B では -o₁語尾と -u 語尾の両方が起っている。この分布によって次のようなことが考えられる。

まず -o₁語尾が中央に起り、中央から次第に東に広まりすでに東国の東のはてまで広がっていた。次に -u 語尾が中央に起り、中央から次第に東に広まっていき、それは地域 C にまで達

していた。地域 B にも達しつつあったが、地域 A には達していなかった。

このように、東国地方の o_1 語尾と u 語尾の分布は、 o_1 から u への母音変化を物語っている。

3.2 *e > i_1 の証拠

東国方言の e_1 と中央方言の i_1 は、形容詞の連体形活用語尾において 18 例、形態素の中において 3 例、全部で 21 例において対応している。なお、詞書によって東国方言の e_1 が起った国が特定できる場合は、その国の名を括弧内に入れた。

東国 e_1 : 中央 i_1 (活用語尾) (18 例)

(Vol.14) $kanasike_1$: $kanasiki_1$ (3412 上野), $to_2ke_1yasuke_1$: $to_2ke_2yasuki_1$ (3483), $uraganasike_1$: $uraganasiki_1$ (3500), $kanasike_1$: $kanasiki_1$ (3517), $kanasike_1$: $kanasiki_1$ (3533), $kanasike_1$: $kanasiki_1$ (3548), $kanasike_1$: $kanasiki_1$ (3551), $nayamasike_1$: $nayamasiki_1$ (3557), $kanasike_1$: $kanasiki_1$ (3564), $kanasike_1$: $kanasiki_1$ (3576),
(Vol.20) $ke_1:ki_1$ (4337 駿河), $kanasike_1$: $kanasiki_1$ (4369 常陸), $kanasike_1$: $kanasiki_1$ (4369 常陸), $kuyasike_2$: $kuyasiki_1$ (4376 下野), $asike_2$: $asiki_1$ (4382 下野), $nagake_2$: $nagaki_1$ (4394 下総), $utukusike_2$: $utukusiki_1$ (4414 武蔵), $sumi_1yo_2ke_2$: $sumi_1yo_2ki_1$ (4419 武蔵)

東国 e_1 : 中央 i_1 (形態素内) (3 例)

(Vol.14) $semi_1do_1$: $simi_1du$ (3546),
(Vol.20) $sake_2ku$: $saki_1ku$ (4368 常陸), $sake_2ku$: $saki_1ku$ (4372 常陸),

e_1 の起った国が特定できる例が全部で 10 例ある。一方同じ東国において、中央方言と同じく形容詞の連体形や形態素内に i_1 が起り、国が特定できる例も 11 例ある。それぞれの例を国別に示す。

国	- e_1	- i_1
下野	伊麻叙久夜之氣 (MYS-20-4376) $ima\ zo_2\ kuyasi-ke_2$ now KPT regret-ATTR 阿志氣 比等奈利 (MYS-20-4382) $asi-ke_2\ pi_1to_2\ nar-i$ bad-ATTR person COP-FIN	
上野	可奈師家兒良尔 (MYS-14-3412) $kanasi-ke_2\ ko_1ra\ ni$ pretty-ATTR child LOC	曾能可抱与吉尔 (MYS-14-3411) $so_2no_2\ kapo\ yo-ki_1\ ni$ that face good-ATTR COP

武蔵	宇都久之氣 (MYS-20-4414) utukusi-ke ₂ pretty-ATTR 須美与氣乎 (MYS-20-4419) sum-i ₁ -yo ₂ -ke ₂ wo live-INF-good-ATTR ACC	己許太可奈之伎 (MYS-14-3373) ko ₂ ko ₂ da kanasi-ki ₁ very sad-ATTR 登吉奈伎母能乎 (MYS-14-3379) to ₂ ki ₁ na-ki ₁ mo ₂ no ₂ wo time not exist-ATTR thing ACC 麻可奈之伎 (MYS-20-4413) ma-kanasi-ki ₁ very-pretty-ATTR
下総	奈賀氣己乃用乎 (MYS-20-4394) naga-ke ₂ ko ₂ no ₂ yo ₁ wo long-ATTR this night ACC	曾能可奈之伎乎 (MYS-14-3386) so ₂ no ₂ kanasi-ki ₁ wo that pretty-ATTR ACC
常陸	可奈之家伊母曾 (MYS-20-4369) kanasi-ke ₁ imo ₂ so ₂ pretty-ATTR wife ACC 佐氣久阿利麻弓 (MYS-20-4368) sake ₂ -ku ar-i-mat-e happy-ADV exist-INF-wait-IMP 佐祁久等麻乎須 (MYS-20-4372) sake ₁ -ku to ₂ mawos-u happy-ADV DEF say.HUM-FIN	加奈思伎兒呂我 (MYS-14-3351) kanasi-ki ₁ ko ₁ ro ₂ ga pretty-ATTR child NOM 之氣吉許能麻欲 (MYS-14-3396) sige ₂ -ki ₁ ko ₂ no ₂ ma yo ₂ dense-ATTR tree GEN space EXCL 可具波志伎 (MYS-20-4371) ka-gupasi-ki ₁ smell-good-ATTR
駿河	毛能波須價尔旦 (MYS-20-4337) mo ₁ no ₂ p-az-u ke ₁ -n-ite thing say-NEG-ATTR come-PERF-GER	伊夜等保奈我伎 (MYS-14-3356) iya to ₂ ponaga-ki ₁ very long-ATTR
遠江		已麻叙久夜志伎 (MYS-20-4337) ima zo ₂ kuyasi-ki ₁ now KPT regret-ATTR 可之古伎夜 (MYS-20-4321) kasiko ₁ -ki ₁ ya gracious-ATTR EXCL

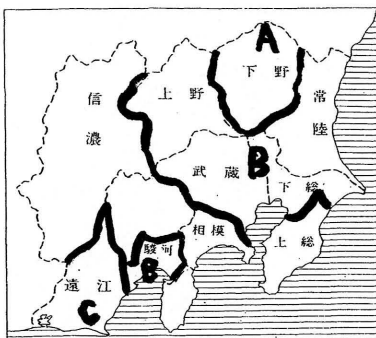
e_i語尾と-i_i語尾の数を国ごとに示したのが次の表2である。

表2：東国方言 国ごとの-e_i と -i_i の数

国/ 語尾	-e _i	-i _i	合計
A 下野	2	0	2
B 上野	1	1	2
武蔵	2	3	5
下総	1	1	2
常陸	3	3	6
駿河	1	2	3
C 遠江	0	1	1
合計	10	11	21

この結果から東国を、-e_iのみが起る地域 A（下野）、-e_iと i_iが起る地域 B（上野・武蔵・下総・常陸・駿河）、-i_iのみが起る地域 C（遠江）の三つに分けることができる。次の地図2に、この三つの地域を示す。

地図2 東国の三つの地域



中央の奈良では-i_i語尾のみが起っている。中央から最も近い地域 C でも-i_i語尾のみが起り、中央から最も遠い地域 A では-e_i語尾のみが起り、その中間の地域 B では-e_i語尾と-i_i語尾の両方が起っている。この分布によって次のようなことが考えられる。

まず-e_i語尾が中央に起り、中央から次第に東に広まりすでに東国の東のはてまで広がっていた。次に-i_i語尾が中央に起り、中央から次第に東に広まっていき、それは地域 C にまで達していた。地域 B にも達しつつあったが、地域 A には達していなかった。

このように、東国地方の e_i語尾と i_i語尾の分布は、e_iから i_iへの母音変化を物語っている。

この結論は、次の北条（1966: 38）による記述からヒントを得たものである。

形容詞連体形一ケは従来は簡単に一キの訛形として扱われて来たが、比較方言学的立場

で考察を加えれば、むしろキの前形として考へるべきであって、一中略一。東国語では全般的に言へば（かう称したのは東国 12 国さらにそれが地域的に細分されるので A 地域ではケのみ、B 地域ではキのみ、C 地域ケ・キ並存、といふやうなことが実際には考へられるからである）ケ・キの両者並存時代と言ふことができる。キの成立は東国に於ける独自のものでなく、中央語の伝播浸透と考へられる。

3.3 まとめ

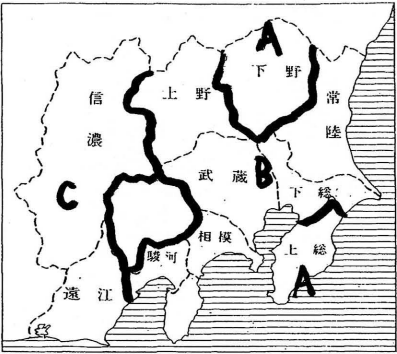
東国地方における o_1 と u の分布状況、 e_1 と i_1 の分布状況から、2.1 では o_1 から u への母音変化を、2.2 では e_1 から i_1 への母音変化を論じてきた。この二つの分布を次の表 3 にまとめる。

表 3 東国方言 国ごとの $o_1 \cdot u$ と $e_1 \cdot i_1$ の数

国/ 語尾	- o_1	- u	- e_1	- i_1	- $o_1/-e_1$	- $u/-i_1$
A 下野	2	0	2	0	4	0
上総	1	0	0	0	1	0
B 上野	3	3	1	1	4	4
武蔵	1	2	2	3	3	5
下総	1	1	1	1	2	2
常陸	1	6	3	3	4	9
相模	2	3	0	0	2	3
駿河	0	2	1	2	1	4
C 信濃	0	4	0	0	0	4
遠江	0	2	0	1	0	3
合計	11	23	10	11	21	34

この結果から東国を、 $-o_1 \cdot -e_1$ のみが起る地域 A（下野、上総）、 $-o_1 \cdot -e_1$ と $-u \cdot -i_1$ が起る地域 B（上野・武蔵・下総・常陸・相模・駿河）、 $-u \cdot -i_1$ のみが起る地域 C（信濃・遠江）の三つに分けることができる。次の地図 3 に、この三つの地域を示す。

地図 3 東国の三つの地域



中央の奈良では $u \cdot -i$ 語尾のみが起っている。中央から最も近い地域 C でも $u \cdot -i$ 語尾のみが起り、中央から最も遠い地域 A では $-o_1 \cdot -e_1$ 語尾のみが起り、その中間の地域 B では $-o \cdot -e_1$ 語尾と $-u \cdot -i$ 語尾の両方が起っている。この分布によって次のようなことが考えられる。

まず $-o_1 \cdot -e_1$ 語尾が中央に起り、中央から次第に東に広まりすでに東国の東のはてまで広がっていた。次に $-u \cdot -i$ 語尾が中央に起り、中央から次第に東に広まっていき、それは地域 C にまで達していた。地域 B にも達しつつあったが、地域 A には達していなかった。

このように、東国地方の o_1 語尾と u 語尾の分布、 e_1 語尾と i 語尾の分布は、 o_1 から u への母音変化、 e_1 から i への母音変化を物語っている。

すでに 1.3 でも述べたように、服部 (1976) は、現代八丈島方言の動詞連体形 [iko] (行く)、[tasō] (足す)、[tato] (立つ) と形容詞連体形 [amake] (甘い)、[karake] (辛い)、[nagake] (長い) を、上代東国方言の動詞形容詞連体形 of the 古形を保持するものとして挙げている。Thorpe (1983:235) も [iko] (行く) と [okiro] (起きる) の例を挙げ、同じ指摘をしている。これらの八丈島方言の形式は、二つの母音変化の有力な根拠となろう。

また、これらの母音変化が $o_1 \cdot e_1$ という甲類の母音のみに起きていることも注目に値する。主母音の組み合わせでできた乙類の母音 $e_2 \cdot o_2$ がそれぞれ主母音 /i/・/u/ に変化することは考えにくいからである。

3.4 東国方言—古さと新しさと

2.1 で取り上げた動詞助動詞の語尾 $-o$ と 2.2 で取り上げた形容詞語尾 $-e$ は、どちらも東国方言における古い音韻であることを論じてきた。一方東国方言には、奈良方言よりも新しいと考えられる音韻もある。古さだけでなく、新しさの可能性もここでは追求してみよう。

次の表 4 は、東国 (左側) と中央の奈良 (右側) の間のそれぞれの母音対応のうち、左側の母音を含む語が東国のそれぞれの地方に起る頻度を示したものである (括弧内の数字はそれぞれの母音対応の総数を示す)。

表 4 東国と中央の母音対応の分布

A 群

$o_1: u$	(22)	陸奥 1, 下野 2, 上総 3, 上野 4, 武蔵 6, 下総 3, 常陸 1, 相模 2
$e_1: i$	(13)	下野 3, 上野 1, 武蔵 2, 下総 1, 常陸 4, 駿河 2

B 群

$i: a$	(6)	相模 6
$a: o_2$	(5)	下野 4, 上野 1
$i: e_1$	(7)	武蔵 2, 相模 1, 駿河 4
$u: o_2$	(6)	上野 1, 武蔵 2, 信濃 3
$e_2: o_2$	(12)	陸奥 1, 下総 1, 駿河 9, 遠江 1
$o_2: e_2$	(6)	下総 1, 駿河 2, 遠江 2, 信濃 1
$u: o_1$	(15)	下総 3, 常陸 6, 駿河 1, 遠江 4, S 信濃 1

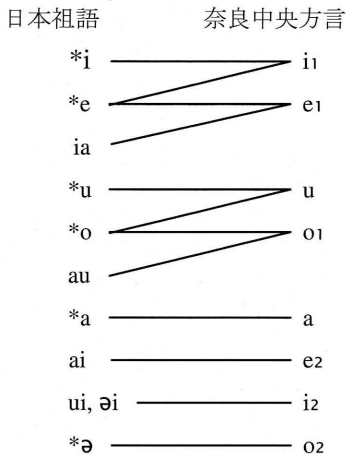
A 群は 2.1 と 2.2 で取り上げた母音対応の分布、B 群はそれ以外の分布である。A 群の二つの母音対応の分布の特徴は、東国の西側の国々（遠江、信濃、駿河）が全くなく、真中と東のみで起る対応であるということである。このような分布は東国の母音が古いことを物語っていることは 2.1、2.2 で証明した。

一方、B 群にある母音対応の分布は i:a が相模のみ、a: o2 は東側の国のみ（下野、上野）という偏った分布を見せ、さらに i1: e1 は駿河・相模・武蔵という連続した真中の国のみに起っている。u: o2 についても武蔵・上野・信濃という連続した地域に起っている。e2: o2 については駿河と遠江という連続した地域と、下総、陸奥という離れた地域に起っている。o2: e2 も駿河・遠江・信濃という連続した地域と離れた下総に起っている。u: o1 についても東側の下総・常陸という連続した地域と西側の駿河・遠江・信濃という連続した地域が互いに離れている。東国の古い音韻の分布を表す A 群の分布に対して、ある地域のみ固まって起ったり、離れた地域に起るといふ B 群の分布は、東国の新しい音韻を表しているといえるのではないだろうか。

4. おわりに

以上、日本祖語の母音体系はどのようなものであったかについて、先行する学者の説を踏まえつつ考察してきた。現時点では服部の六母音説を支持したい。バランスも取れているし、母音の融合によって奈良時代の八母音も説明できるからである。日本祖語から上代にいたる母音変化をもう一度図示する。

図5 日本祖語から上代への母音変化（服部の説をもとに）



これらの母音変化の実例を示そう。

母音変化	例	意味
*i > i1	miti > miti	道
*e > i1	utukusike1 > utukusiki1	美しき

*e > e ₁	yamabe > yamabe ₁	山辺
ia > e ₁	saki-ari > sake ₁ ri	咲けり
*u > u	saku > saku	咲く
*o > u	yuko ₁ saki ₁ > yukusaki ₁	行く先
au > o ₁	kura-u > kuro ₁	黒
*a > a	aki ₁ > aki ₁	秋
ai > e ₂	taka-iti > take ₂ ti	高市
ui, əi > i ₂	kamui > kami ₂	神
*ə > o ₂	korə > kor ₂	子ろ

これらのうち、「*i > i₁」「*e > e₁」「*u > u」と「*a > a」については全く変化のないもの、「*e > i₁」と「*o > u」については東国方言の例で証明したもの、「ia > e₁」と「ai > e₂」「ui, əi > i₂」については融合の典型的なもの、「au > o₁」の語尾-uと「*ə > o₂」の*əは推定の母音である。

東国方言による和歌の、形態素につけた省略記号は以下のとおりである。

ACC: accusative 対格

ADV: adverbial 連用

ATTR: attributive 連体

CONJ: conjunctive 接続助詞

CONS.GER: consecutive gerund 確定条件

COP: copula 繫辞

DEF: defective 欠如詞

DESD: desiderative 願望

EMPH: emphatic 強調

EXCL: exclamatory 感動

FIN: final 終止

GEN: genitive 属格

GER: gerund テ形

HUM: humble 謙讓

IMP: imperative 命令

INF: infinitive 連用形名詞

KPT: kakari particle 係助詞

LOC: locative 場所格

NEG: negative 否定

NOM: nominative 主格

ONMP: onomatopoeia 擬音語

PERF: perfective 完了

TENT: tentative 推量

TOP: topic 話題

注1：橋本（1931）で「ぬ」と読まれていたのが、橋本（1932）で「の」に改められた。

参考文献

石塚龍磨（1798）『仮名遣奥山路』（正宗敦夫編 1978 所収）。

大野 晋（1977）「音韻の変遷（1）」『岩波講座日本語 5』東京：岩波書店。

大野 晋編（1968）『本居宣長全集』（第 9-13 卷）東京：筑摩書房。

金田一京助（1938）『国語音韻論』東京：刀江書院。

橋本進吉（1931）「上代の文献に存する特殊の仮名遣と当時の語法」『国語と国文学』8-9（1949 所収）。

———（1932）『国語学概論』東京：岩波書店。

———（1942）『古代国語の音韻に就いて』東京：明世堂書店。

———（1949）『文字及び仮名遣の研究』東京：岩波書店。

服部四郎（1976）「琉球方言と本土方言」伊波普猷生誕百年記念会編『沖縄学の黎明』7-55. 東京：沖縄文化協会。

北条忠雄（1966）『上代東国方言の研究』東京：日本学術振興会。

正宗敦夫編（1978）『日本古典全集』東京：現代思潮社。

松本克己（1995）『古代日本語母音論』東京：ひつじ書房。

本居宣長（1798）『古事記伝』（大野 晋編 1968 所収）。

Serafim, Leon A. (1977.) *The Relationship of Pre-Japanese and Proto-Japanese*. Paper presented to Symposium on Korea-Japanese Relationships, LSA Summer Meeting, Honolulu, Hawaii, August, 1977.

Thorpe, Maner. (1983.) *Ryūkyūan Language History*. Dissertation, USC.

A Reconstruction of the Proto-Japanese Vowel System on the Basis of the Data from Eastern Old Japanese

HINO Sukenari
Fukuoka Jogakuin University

Keywords: proto-Japanese, special orthography in Old Japanese, fusion, Eastern dialect, attributive

*This paper proposes a proto-Japanese (PJ) vowel system based on Hattori (1976) and the data from the Eastern dialect of Old Japanese (OJ) . Hattori presents a six vowel system with *i, *e, *u, *o, *a and ** in PJ, which became an eight vowel system in OJ through fusions and raisings as shown in Figure 1 . However, not all *ia and *au became e* and o*, respectively. Some of *e and *o must have stayed the same in OJ. I have revised Figure 1 and now propose Figure 2.

Figure 1 (Vowel change from PJ to OJ)

PJ		OJ (in Central Nara)
*i	_____	i1
*e	_____	i1
*ə	_____	o2
*a	_____	a
*u	_____	u
*o	_____	u
*ai	_____	e2
*ia,	_____	e1
*au	_____	o1
*ui,əi	_____	i 2

Figure 2 (Vowel change from PJ to OJ, revised)

My data from OJ show the vowel raisings from *e to i and *o to 'u.

PJ		OJ (in Central Nara)
*i	_____	i1
*e	_____	e1
ia	_____	
*u	_____	u
*o	_____	o1
au	_____	
*a	_____	a
ai	_____	e2
ui, əi	_____	i2
*ə	_____	o2